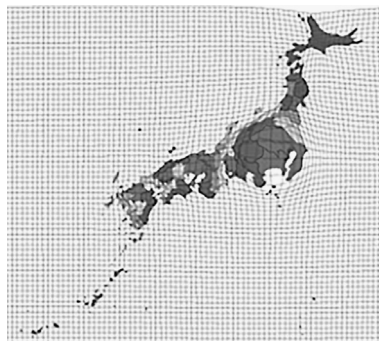


第4次産業でふるさと快活

図式表示で「分かる化」すると

前世紀の1960年代の最も国民的な言葉は、「大量生産・大量消費」であった。その後今世紀の今日も蔓延しているのは、「東京一極集中」である。日本人の傾向は、素直で、「右に習え」が好きな国民で、唯々諾々の性癖が強いといわれる。コロナウイルス対策でも、大人しく（音無し）国全体が一つの方向に染まる。それは、いい側面もあるが、一辺倒であり独自性が薄い欠点でもある。多様性という言葉がよく発せられるが、まだ身につけていないのが現実と言えそうだ。



海道や東北は委縮して表示されている。筆者の研究分野では、風力・太陽光・水力・バイオマス・地熱など再生可能エネルギーの潜在量（ポテンシャル）と利用の現実（設備容量）をカルトグラムを用いて表記してみると、ポテンシャルと設備量のミスマッチが目瞭然となり、利用開発がすべき地域を照準化できる。カルトグラムは、「分かる化」の刺激的な手法と言える。

持続可能性とエコミッショ

前図のように、人口密度のアンバランスは、日本の地図をも歪めるほどである。過密と過疎は、双方に、生活の質の低下や暮らしの不便さを与えている。

現実的な対応には、エコという磁場をつくる必要がある。ここで「エコ」は、経済のそれとともに、「オイコス」というラテン語に派生する「我が家」の意味（言い換えると「居場所」の意味）を重用したい。地方の「持続可能性」は、明確に若者が駆動力となる。そうしたミッションを、地方の農林漁業高校生が担い、実行している。

地元力発見！

佐藤建吉 「洗楓座」代表

② どちらにおいても「持続可能性」の展望は見られない。SDGsを唱えても、揺るぎなく、それは、エコへのミッションで

あると言える。

農林漁業と自然資源を対象とする「1次産業」の現場である。地方は、過疎化して休耕田や休耕地、さらには放置された山林や漁場などが多い。食や住との関係では食品加工や建材加工などは、「2次産業」である。その製品を大消費地の東京・首都圏や大都市などに流通させるサービス産業は、「3次産業」と呼ばれている。

これら1次・2次・3次産業を取り込んだ複合的な産業は、「6次産業」、あるいは「産業の6次化」と呼ばれている。1次産業を基本とする分野ではよく知られた言葉である。「6次産業」という言葉は、もはや国民的合意が得られている。

地方の若者が支える第4次産業

「東京一極集中」は、人材を

も首都圏に引き寄せた。その結果、地方は過疎となり、しかも首都圏に引き寄せられなかった高齢者が残ることになった。結果として、高校学齢期の人口も減り、職業高校の統合や廃校が進んでいる。

しかし、前世紀に地元へ人材を多数輩出した農業高校は、今世紀も食（フード）と農（アグリ）という、生きる糧を守る地場産業の担い手をなお輩出する役目を持っている。

この局面で、「4次産業」が登場した。それは、今日的な必要性から生まれたと言える。揺籃期の4次産業には、いろいろな方面（分野）があつていいと思う。1つには、やはり、人材育成の分野。2つには、ICTの分野。さらに3つには、観光交流を挙げる人もいる。従来の3次産業に近いとも言えるが、新しい分野として独立した方が、発展のポテンシャルが大きくなる。

例えば、アグリ&フードの分野においても、新しい食材とレシピの開発、その表現と伝達。それは、前述した人材育成とICT活用、そして観光交流は、新型産業の必須キーワードである。それこそが、「4次産業」と呼ぶにふさわしい。4次産業は、若者が対象であり、若者の得意分野であり、若者の魅力が光る分野である。それは、過疎を打ち砕き、ふるさとを快活にする地元力と言える。そして、そこから新しい強力磁場表現在生まれてくる。1+2+3+4で「産業の10次化」であり、「10次産業」という、複合産業である。

1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大学院工学研究科准教授（金属疲労専攻）。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洗楓座」代表。「全国ふるさと大使連絡会議」理事。